

---

キミとボク。

替

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キミとボク。

### 【Nコード】

N2823N

### 【作者名】

彗

### 【あらすじ】

優と優衣は幼馴染で親友。

その関係はずっと変わらないと思っていた。  
変わらないものは存在しないの？

## 第1話く思い出す

幼馴染。親友。

そんな関係だった。…と、今は思う。

君がずっと僕の隣にいてくれた。だから、僕は強くなれた気がしたんだ。

目を瞑って瞼の裏に君の顔を思い浮かべた。

すると、そこにはいつも通りの僕の横にあった笑顔があった。タイムスリップでもするかの様に君との過去を振り返った。

「あゝー！くそっ！」

心の中にあるこのモヤモヤとした感覚はなんなのか、想像も出来ずに苛立ちも隠せずに叫んでいた。

蒸し暑い中、僕はただひたすら自転車に乗って自分の家<sup>うち</sup>に向かっていた。

何分かしてまだ真新しい一戸建ての家に着いて、この家の中で一番涼しい居間に入る。

やはり、君はいた。リラックスした状態でお菓子と雑誌を床に広げて寝転びながら…。

呆れる。そんな感情はもう奈落の底に落ちた。

今、もしも「どうして？」なんて聞かれたらこう答える「この季節はいつもだから」と。

「優<sup>すぐる</sup>、お帰りー」

能天気な声がソファの後ろから聞こえて大きく溜息をつく。

「おい、優衣<sup>ゆい</sup>。ここ、避難所じゃないんだけど？」

少し苛立ち交じりの口調で言ってしまった。だが、すぐに後悔した。

「わたしの家がクーラーなくてすっごく暑い知ってるでしょ！」

「それより、なにかあった？」  
ソファの横に腰を下ろした後、優衣を見つめるとにやついていると  
言っている位の笑みを浮かべて  
こちらを見ていた。むかつく。何だろう、弱さを晒している様でむ  
かつく。

## 第2話

「…別に何もない」

俯きながら答えた後また顔を上げて見つめる。

「ねえ、嘘だつてすぐ分かる…。何があったの？」

呆れるように溜息をつくと少し不機嫌そうな顔をしてこちらを向いてきた。

正直、昔からこの顔には何故か弱い。今、もしかすると泣きそうな顔をしている気がする。

「…：お前のせいでちよつと春しゅんと喧嘩けんかというか…：口論くろんになってさ」  
弱々しい口調で呟くと顔をそらして窓から見える青々とした空を見上げる。

「すつごく意味不明！説明してよ！」

口調が一気に不機嫌になる。こうなるから嫌だったんだと思った。  
何故って、君のあいつを想う顔が苛立ちを想い出させる。

「嫌だ。」

また、苛立ち交じりの口調で無駄だと分かっているも頑なに拒んだ。  
無駄な抵抗。心の中でそんな声が聞こえた気がする。  
すると、

「で、優は何に怒ったの？」

「なんで俺が怒ったってなるんだよ！」

「だって、綺堂きどうくんが怒るわけじゃん？」

「…っ、そうだけど。女子にだけだろ！」

ヒステリックな口調になりながら言い放った。なんで、こんなにすれ違ちがうんだよ。

「優だつて…外面そとづかばっかいいのは同じでしょ！」

トドメを刺された。言い返せない事実を言われて、涙がこみ上げてきた。情けない。

「確かに外面そとづかばっかでにこにこはしとくよ、そりゃ。」

「ほらね……。でも、優と春は人気者だよね」

有無を言わさぬ口調で聞いてくる。いつもの抵抗も無駄になるなど心の中で呟いた。

「は？ 人気者って…？」

「男子にも女子にも人気じゃん？」

「そうでもない…と思うけど」

ゴニョゴニョと口籠もるように喋ると急に頭を撫でられた。

「なんでみんなこんな弱虫で泣き虫な奴が好きなのかなー」

「弱虫とか泣き虫って昔の話だろ！」

### 第3話

沈黙が流れた。まあ、すぐに終わりになったが……

「気にしてるの？」

その言葉に少し固まる僕がいることに気がつく。

心の中では「弱いところを見せたくない」って強気に叫んでる僕がいる。

「そりゃ……男子だからな。一応。」

最後の部分で気弱になりだんだんと声が小さくなった。

「えっ？ ちょっ、声小さ」「いいだろ」

君の言いたいことは分かってるんだ。だから…、そんな今にも泣きそうなのに怒った顔しないでくれよ。君と過ごせる最後の夏休みかもしれないんだから……。

いつまでも二人は黙っていて、そんな事じゃ何も解決されないと思って口を開いた。

「「あのさ……」」

少し間が空いたが2人は気にせず顔を見合せて笑った。

僕は苦笑い気味に、君はいつもの様なやわらかい笑みを浮かべて。

君との幸せが永遠であればいいのに。

そうやって、心の中で君のために願ったのもこの瞬間だった気がする。

それから、先に僕が口を開いた。

「えっと、春と口論になった件だけどさ……。どっちが優衣と夏祭り行くかで揉めて……」

乾いた笑みを浮かべははっと笑うと、突然頭を叩かれた。

「なっ！？ ちょっ、いつてえー……」

涙目になりながら優衣を見上げる。

「そんなんだったら、3人で行けば解決でしょ！？ なんで喧嘩する必要があるの！」

母親のような口調になり僕を少し険しくそれでも心配そうな顔つきで見下ろしてきた。

その表情に少し口元が緩み微笑むとまた一撃が飛んできたがなんとか避けれて一安心した。

「だーっ！最初はさそういう風に決めてたんだけど…。春の取り巻きみたいな女達が煩くって」

「ああ……。そういうこと」

小さく溜息をつくと外を見つめながらぼーっとしている優衣を見つめた。

「優はさ…、ファンクラブの子達いいの？」

「は？」

訳が分からず聞き返すと少し呆れたように笑う優衣がいた。

「だーかーらーっ！ファンクラブ！気付いてないの！？鈍すぎっ！」呆れたように僕を見つめる君がいて、少し戸惑った。

ちよっと怒っているのか、呆れているのか早口になって僕を問い詰める君をいつもなら思わないのに

愛おしいなんて変だと思うがそう思ってしまったのだ。僕の自嘲的な笑みが嫌いな君に、

バレない様頬を緩めた。その事に、君が気が付いていたのか気が付いていなかったのか今でも僕には数学の難問を解くように頭を捻らなければ答えなんて見えない事が分かる。

「へー……。ファンクラブなんてものが存在したんだ。」

少し感心しながら、そしてほんのちよっと驚きながらその存在を笑う様に呟く。

「まあ、綺堂くんのは表でしかだけど……。優のは隠れファンと表の2つがメインらしいから」

……。少しの間、僕の思考は停止してしまった。そんなの意味が分からないじゃないか。

合体させればいいのに、なんで2つもあるんだ！？そういう考えをいくつも張り巡らされた僕の頭はショート寸前。やっと思意味不明な



考えから脳が復旧を始めた。大きく溜息をつく。

そして、納得してしまう点も生まれた。優衣の隠しているようで隠していない傷の事だ。

夏祭り前には痣がいくつも出来る様になったのだ。気付いていたのに、守れなかった。馬鹿みたいな自分に今更、気が付く。女の嫉妬というのか、そういうものは僕や春に直接来ない。

何故なら、僕たちにも嫌われずに嫉妬をぶつけられる良い獲物がいたんだから。情けないよ。

再度自分に呟く。今年だけは優衣を守らないと男が廃る気がする。来年からは春に任せよう。

「：おーいっ？何ばーつとしてんの？」

気が付くと優衣の顔が目の前にあった。この状況は少し、いやかなり悪い。

「なんでもない。そんなに顔近づけてると他の奴はキスするぞ？」  
抑揚のない口調で説教をする。そんな状況なのに優衣はけらけらと笑っていた。

「優ちゃんは私より気弱だから平気だよーっ。」

なんで君は僕を男として見ないんだよ？なんて考えながらも口に出せずはあっと大きく溜息をつく。

「なあ、今年は俺と夏祭り一緒に行けるだろ？」

少し懇願するような瞳で見つめると少しばかりたじたじになるのが優衣の癖というか弱点。

俺って主語と半ば強制的な口調になるのは僕の悪い癖というか弱点。

「はいはい、最初っからそのつもりだから」

子供のように負けず嫌いからなのかにーつと笑う姿に自然と笑みを浮かべていた。

「さんきゅ」

少し上機嫌になり過ぎて傍によってぎゅーつと抱きしめると、どこか聞き覚えのある女達の黄色い悲鳴が聞こえて来た。我に返って外を見つめると半分位開いていたカーテンの間から垣根越しに同じ学

校の多分同学年であろう女子達がいて少し眉間に眉を寄せて見つめた。優衣はその状況に、少し驚いているのか硬直しながら座っている。窓を開けて女子達に視線を向ける。

「いつからそこにいたわけ？」

にっこりと外面そとづらだけはいいいせいなのか笑みを浮かべて尚且つ首も傾げて聞くとその集団にいた女子からまた黄色い悲鳴があがった。心の中で溜息はつくものの表情はそのまま。

「えっと……つい、さっきから」

少し緊張しているのか声を上ずらせて一人が答えた。

「だから、それはいつごろ？」

にっこりと再度笑みを浮かべて言う。ああ、疲れる。

「え、えっと……。だ、だ、抱き合う前くらいですっ！」

「用もないくせにストーカー？」

もう、平気なのか……。優衣が隣に立って女子に聞いた

「ち、ちがうからっ」

その女子は嫉妬を露わにしながら睨んでいた。醜いな……。呑気に見つめて心の中で呟く。

優衣は一部の女子には崇められているが、春や僕なんかのファンクラブラしきものに所属しているやつには大抵睨まれていたらしい。まあ、これは後日談でしかないが……。優衣も結構外面だけ猫を被っていたからなのか終始自分に非がなければ笑っていた。そこが優衣のいい所なのだが、本人に自覚なし。

「早く帰れよ。鬱陶しいから」

見事に声を重ねながら天使の様なにっこりとしたそれでいて悪魔のような邪悪さを含んだ笑みを浮かべて微笑んだ。そうすると、女子達は少し泣きそうになりながら集団で帰っていった。

多分、抱き合っていたことなんて明日のうちにみんな知っているが冗談ですむはず……。

窓を閉めてきっちりカーテンを閉めて先にソファに膝を抱えながら座っている優衣の横に腰を掛ける。

「ありゃ、焦るな……。」

「うん。っていうか結構写真撮られてたけど、平気なの？」

「げっ!? まじかよ!？」

「綺堂くんに出動してもらわないとネガは盗れないだろうねー!」  
くすくすと他人事のように笑う優衣をみて自分もはっと乾いた様に笑った。

「まあ、もう平気だと思うけど。」

その言葉に優衣は首を傾げた。外から女子の黄色い悲鳴と聞き覚えのある声が聞こえてくる事に気が付いて優衣は溜息を付いた。そして、それと同時にドアベルがなった。

「おい、来たぞー」

2階から人一倍大きな声が聞こえてきた。そして、ゆっくり階段を下りてくる。

「なんで、お前はいつも普通に来る事が出来ないんだよ」

「そりゃー…。俺のファン達が迷惑掛けるといけないからさー」

「春が楽しただけだろ?」

陽気な口調でけらけらと笑う。呆れたように繰り返されているこれも日常のうち。

いつ、どこで、喧嘩や口論しようともお互いが頭を冷やせばいつも通り。

「綺堂くん、おかえりー。優と喧嘩したんじゃないの?」

不思議そうに首を傾げて優衣はとことこつと歩いてきた。

「あのなー…。優衣も春でいいって。あと、それはもう終わったことだ」

にかつと笑みを浮かべても優衣と僕には効きもしない。

「「ふーん」」

2人一緒に声を合わせて答えると、ダメージが2倍になるらしく春は苦笑いを浮かべた。

「で、ネガは?」

淡々とした口調で手を差し出し渡せと要求する。

「頬にキスしてやったらすぐにくれたよ」

ご満悦に言う口調からして好みだったんだろう。

その発言の前に優衣の耳を塞いで、終わったところで塞ぐのを止める。盛大な溜息を付くとネガを片手から奪い去った。びーっとフィルムを引っ張り出して太陽に当てる。

「これで駄目になるかな…」

呆れたようにため息を吐いて苦笑いをする優衣を見つめた。

## 第4話

それから、僕達はゲームをしたり僕の家にあるお菓子を遠慮もせず  
に2人が食べながら

今日学校であった出来事を事細かく話して笑いながら過ごした。

気が付くと外ではもう夕日が沈んでいて夜へと近づいている事が分  
かった。

「お前ら、いい加減帰れよ……」

僕の言葉を見無視して、優衣と春はのんびりとくつろぎながらテレビ  
を観て笑っている。

その2人にもう一度声を掛けようとしたその時だった。

外で車のエンジン音が止まりガチャッと音を立てて扉が開いた音が  
した。

家主である三つ子の兄（十姉）達がなぜか帰ってきたのだ。

こちら辺であんな煩い車を運転している奴なんてそこまでいない。

「ただいま。あれ？出迎えなし？」

重なって聞こえる3つの呑気な声が玄関から聞こえてきて少し苛立  
つが口には出さない。

喧嘩をすればどちらが勝つのか分かっているから、無駄な言い争い  
はしない。

3対1じゃ勝ち目はない……。

「おかえり」

それだけ言うともまた優衣と春の方を向いた。すると、2人の姿は消  
えていて玄関先から驚いたような

重なった声が聞こえた。呆れる。僕まであのうるさいあいつらの所  
まで行かなきゃならなくなったじゃないかと心の中で呟き、玄関へ  
と向かう。勢ぞろいの超多忙なはずの奴ら。疲れる原因がまた増え  
た。

本来、僕は今日の前にいるこいつらに生活費を送って貰いこの大き

な祖父が残したこの家で

一人暮らしだ。僕が小学校を卒業した時それと同時に3人は大学を卒業……翌日、こいつらは

「行ってきます」そう書いたメモとかなりの額のお金を残して消えたのだ。翌年何らかの方法で成功。社長となって東京で働いている。月1の手紙と仕送りそれから2ヶ月に1度集まって食事を食べる決まりを作った。そして、今日はその日……ではないはずだ。一週間も早い。

「なんで海かいも空そらも葵あおいもこんなに早く帰ってきたんだよ？」  
「なんだっていいだろーよ」

少し楽しそうな口調で3人一緒に答えた。

葵は大きな袋を持っていて優衣に耳打ちをすると部屋に入ってしまった。相変わらずマイペース。

上から女子特有の声が聞こえてくる。多分、葵が持っているブランドの新作を持ってきて試着しているのだろう。きやいきやい騒いでる優衣の声は楽しそうだった。

空は春の先輩というか師匠とでも言うのだろうか……訳の分からない話で盛り上がって部屋に行ってしまった。……呆れた。自分のペースで突き進む4人を僕と一緒に呆れている人物がいる事に気が付いたが無視スルーする。

「無視はするなよ？早く帰ってきた理由わけを知りたいだろ？な？」  
玄関からゆっくりと歩いて2人で僕の部屋へと入る。

「で？早く理由を言えば……？」

「あれ？見当はついてると思っただが……」  
にっこりと笑みを浮かべて海は首を傾げる。

「……まさか、イタリアとフランスに行く話本気マジだったわけ？」

「まあな……。夏休みが終わったら俺達と」

ふうと溜息をついて落ち着かせる。だから、葵と空が優衣と春を部屋に連れってたのか……。

苦笑いを浮かべ自分が不思議に思わなかったことに後悔した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2823n/>

---

キミとボク。

2010年10月12日15時11分発行